

# 健全な男女共同参画社会をめざす会

正しい男女平等とは

[トップ](#) [入会のご案内](#) [会報](#) [活動内容](#) [リンク集](#) [お問い合わせ](#)

[会報一覧に戻る](#)

## なでしこ通信 23号

### なでしこ通信

### 第23号



#### 目次

- ジェンダーフリー退治の急所について  
—「母なるもの」の保護ということ—  
弁護士 徳永信一
- 請願の反響はあったが一面会希望学生への返書  
水上紘一
- 会員エッセイ 「専業主婦万歳！」 田中直子
- 故石浜典夫氏からのお便り 事務局

健全な男女共同参画社会をめざす会

H20・6・10

## なでしこ通信 第23号

# ジェンダーフリー退治の急所について

～「母なるもの」の保護ということ～

弁護士 徳永信一

ジェンダーフリーに反対される方々は、それが伝統を破壊するものであることを口にされます。それは正しいのですが、なんとなく具体性がなく、説得力に欠けるきらいがあるように感じていました。

例えば、「混合名簿」のことでいえば、それがジェンダーフリー運動の成果であり、その象徴であることは分かりますがではなぜ、「混合名簿」それ自体が悪いのかについて、はっきり伝えることができていないと感じて

いました。名簿の順番なんて目くじらを立てて反対するほどのことかという反論に出会えば、口籠もってしまう人がほとんどではないかと思えます。

保守派の運動というものは、総じて、理屈ではなく、慣習や良識に依拠するという本質的なものがありますから、理屈では説明しきれない点が必ず出てきます。それでも運動であれば、論争は避けられないのであり、そして論争は理屈を闘わせる場ですから、その論法を磨いておく必要があるでしょう。「男女混合名簿」がいけない理由は、「なぜ、男女を区別する必要があるか」という問いに対する答えと同じはずなのですが、このことは、保守の陣営のなかでも、これまで説得的に議論されていないのではないかと感じていました。

いろいろ議論はありますが、男女の区別に関し、誰しもが認めざるをえない生物学的事実は、女性は妊娠するということでもあります。男性のわたしが言



うのもなんですが、「妊娠」は本当に大変なことです。10月もの長期間、さまざまな身体的制約を引受け、苦痛を伴う出産を迎えます。そして生まれた赤ちゃんの母親として、授乳等の育児に拘束されます。授乳は哺乳類としての人類の母が背負った宿命ですから、母となった女性は、出産後も引き続き、社会的活動が制約されることはやむをえません。赤ちゃんの父親が分からないとき、父親がそれを承認しないとき、或いは、不本意な相手による妊娠であったりしたとき、女性は、その一生を台無しにしかねません。そこで「墮胎」という選択があるわけですが、「墮胎」という選択が、当の女性を、身体的に傷つけ、道徳的なスティグマを背負わせるという結果になることを避けられません。それはとてつもないリスクです。強姦が殺人に次ぐ犯罪だといわれるゆえんです。

ところが、男性は、「妊娠」しません。男の子は、妊娠の苦痛、出産の苦痛とは無縁です。婚姻等をめぐる共同体の法制度に入りこまない限り、父親としての責任、子育ての責任もありません。婚姻は、男性に父親としての義務を負わせる制度です。男の子にとっては、女の子の妊娠が、自分との性交によるものであることも、生まれてきた赤ちゃんが、自分の子であると認識する方法は限られていますし、女性を妊娠させても、愛がなければ（愛があっても）、別な女性のところに飛んで行って次々妊娠させることができます。

そんな男性に、特定の女性の「妊娠」と「子育て」の責任を負わせ、共同体の成員としてこれを守らせる制度が婚姻です。このことが、婚姻の制度や儀式が、人類のあらゆる民族・部族に普遍的であることの理由であり、人類社会の単位が家族であることの根源です。

男の子と女の子が、非性の個人として集団的に「性」に出会えば、性交の遊びに没頭し、夢中になることでしょう。それは余りにも刺激的で魅惑的です。男女の区別なく集団で仲間をつくれれば乱交になります。快楽は男女平等に享受できるで

しょう。しかしそのつけ、すなわち「妊娠」は、女の子だけが一方的に負担するリスクです。しかもそのリスクは壊滅的なリスクです。男女の性は、女性だけが「妊娠」という点において永遠に平等ではありません。ゆえに、「妊娠」は女性と男性を、制度として、すなわち社会的に区別する必要の根源です。家族と社会は、そのリスクから女性を—自分の娘たちを—守るためにできたものといってしまってもよいでしょう。



女性を不合理に縛るようにみえるさまざまな道徳やルールや掟は、総体としての女性を不本意な「妊娠」から守るためにできたものです。そのためには、まず、男女を明確に区別し、共同社会が特別に保護する対象を明確にする必要があります。そのためどんな民族も、男女の衣装を区別しました。男女が共通の衣装で生活している民族をわたしは知りません。女が女らしい格好をする、男が男らしい格好をするというのは、保護すべき女を、そうした保護の必要のない男から区別するために必要です。また、社会は、多くの労力とコストをかけて、女の「妊娠」を守る利益もあります。次世代のメンバーを育てるためにも、女性の「妊娠」を保護しなければなりません。

もちろん、共同体における女性全般を守る道徳や慣習は、個々の女性の性の自由等を束縛する局面が生じることは否定できません。それは、やむをえないことです。「性」の誘惑や享楽、恋愛の可能性は、個々人の資質において大きく異なります。個々の女性がしばしば、道徳や慣習と闘うことになることは、母性の保護と裏腹のものです。そのことはその時代における他の生活慣習の変化との調整を要求します。保守派は、決して道徳や慣習や社会的伝統の変化を否定するものではありません。制度や伝統の自生的変化、すなわち「塩梅」の必要があることと、その伝統を根こそぎ否定することとは天地の違いがあります。

男女の区別を否定するジェンダーフリーは、女性だけが妊娠するというリスクを負っているという生物学的宿命から目を背けているだけです。ジェンダーフリーが、なぜ道德の敵か、文化的伝統の敵かは、そこらあたりにあります。すべての文化は、「妊娠」する女性＝即ち「母性」の保護ということに根ざしており、ジェンダーフリーは、女性が「母性」の主体だということを否定することを目指す主張だからです。ですから、ジェンダーフリー思想を奉じている論者が、最も忌み嫌うのは、「母性」の二文字です。彼らは、女を「妊娠」という宿命を通じて社会に拘束するのは「母」という言葉であることを知っています。社会が「母」を大切にし、「母性」を尊重することが、個人としての女性を社会的存在としての「母」に縛りつけることになると信じているからです。

憲法に「母性の保護」を規定している国は、ドイツやイタリア等多数あります。国連の世界人権宣言にも「母性の尊重」が規定されています。そこには、「母なるもの」に対する敬意が、人権文化の根源であり、男女の社会的平等を達成するための道筋だというコンセンサスがあります。日本国憲法の欠陥のひとつは、この「母性の保護・尊重」が規定されていないことです。女性は、単なる個人であるのではなく、「妊娠」というリスクを負い、かつ、その「妊娠」を通じて社会が保護すべき「母なるもの」としての役割を担っていくという当たり前の道理が忘れられているのです。わたしは、「母性保護」の観点から、ジェンダーフリーに反対します。母性を社会が保護すること、そのためにさまざまなルールや道德のマトリックスを形成することを支持します。そのことによって「女らしさ」が社会的な価値として称賛されることを支持します。

マリア様や観音様といった宗教的シンボルが象徴してきた「母なるもの」こそ



が、人の子を「人間」たらしめる人間的伝統の揺り籠であり、「人間の尊厳」の基盤です。道徳や人倫は、男女を区別して女性の母性を保護することと密接に結びついています。ジェンダーフリーは、男女の区別を否定することによって、「母性」（妊娠する性、育児する性、それにまつわる様々な社会的保護の必要性）を忌避し、その延長上で人間的伝統、すなわち「人間の尊厳」を破壊し、彼らがしばしば口にする人権そのものの基盤を掘り崩しているのです。

今、復興すべきは、社会における「母なるもの」に対する敬意なのです。

[本通信のための書き下ろし]



## 請願への反響はあったが

◎ある大学の学生から、12月松山市議会で採択された「問題の請願」について話しを聞きたいという申し入れが、当会の幹事・水上紘一・愛媛大学名誉教授にありました。

先生はその学生の方と直接電話で話をされ、さらに以下の手紙を出されました。学生からは「当方勉強不足につきお会いするのは差し控えることにした」との残念な連絡がございました。

### ■面会希望学生への返書■ 平成20年2月15日

前略 お手紙拝見しました。

ご用件は、松山市議会で請願が採択された件について質問があるので、松山市

でのゼミ合宿中に私の説明を聞きたい、ということと理解しました。  
私は年金生活者で時間に関しては自由がありますから、応じることは可能と思います。もちろん、いつでもというわけにはいきませんが。  
お手紙には質問は3つと書かれていますが、私は以下のように分類しました。

- (1) 伝統と文化の尊重とジェンダーフリー思想とがどのように相容れないのか
- (2) 日本は伝統的に女尊の社会であるという具体例
- (3) 専業主婦の社会的貢献の評価の基準と支援の具体的内容
- (4) 主夫についての私の見解
- (5) ジェンダー学は新しい道徳として推奨できるのではないか

「どんな具体例があるか」という質問は、質問という形は取っていても追及・糾弾的になっているということにお気づきですか。あなたも20年は日本の社会と文化のなかで生きてきたのです。そして、今は学生です。先ず、周囲を注意深く観察して自分で考えるなり、調べるなり、友人と議論するなりしてみたら如何ですか。そうすれば、思い当たることが出てくるでしょう。安易に問う姿勢から、私は追及・糾弾的匂いを嗅ぎ取ります。

この返書には諸文書を同封しています。そのうち、市議会への請願に直接関係するものとしては、

○請願の根拠および理由などの説明（参考）

この文書は、「参考人の説明」とともに市民福祉委員会で配布したのですが、口頭での説明は省略しています。

○本会議における池本俊英議員の賛成討論

があります。他に

○週刊愛媛経済レポートのコラム（4週分）

このコラムでは、地元の愛媛新聞の報道を批判しつつ請願の意味を解説しています。

○ジェンダーフリーを鍵にして松山市男女共同参画推進条例を読み解く

この文書が作成できて、請願が可能になりました。

○「健全な男女共同参画社会をめざす会」会誌数号が同封されています。

上記の諸文書には、ご質問に対する回答が十分述べられていると思います。しかし、(1)に関する恰好な具体例が新たに生まれましたので、紹介しておきましょう。今月初め、松山市男女共同参画推進センター（通称はコムズ）でコムズフェスティバルが催されました。仲間が数人、ウォッチングに行ったのですが、まるで共産党員の懇談会だったとのこと。このフェスティバルで、

「桃から生まれた桃子ちゃん」の簡易芝居が行われました。それについて小論を書いた方がいますので、その一部を借用して次に示します。

「先日開催されたコムズフェスティバルの分科会に参加し、ペープサート劇「モモタロー・ノーリターン」を鑑賞した。おとぎ話のジェンダーフリー版である。

物語はまず、おばあさんが柴刈り・洗濯という「男女による性的役割分担」に異議を唱えるところから始まる。洗濯のしんどさに音を上げたおじいさんは大きな桃を発見するが、あまりの重さに持ち帰れず、おばあさんから「切り分けて持って帰ればいいのに」と揶揄される始末。むろん話の展開上、生まれたのは「桃子ちゃん」である。二人は家事や育児を「共同分担」しつつ桃子を育てる。男らしさ・女らしさを「刷り込まれず自由に」育った桃子は、村人だけでなく同族の女をも迫害しているという鬼の話を聞き、彼らをこらしめるため「自発的なボランティア」を引き連れ、鬼の村を包囲する。ジェンダーフリー



の提案に説得された女鬼は桃子軍に寝返り、メシの支度一つしたことのない家父長的封建的な男鬼たちは空腹に耐えかねて降伏を申し出る。桃子はその後ジェンダーフリー思想の宣布者として村を去り、残された桃の木からは第二・第三の桃子が生まれる、というエンディングである。

男女平等はわが国の基本原則であり、女性蔑視やDVは許されざる行為である。しかし、古来からのおとぎ話にジェンダーの視点をあて、その中に潜む差別性を嗅ぎ取ろうとするマニアックな解釈は、私的会合や市民グループの集いならいざ知らず、税金で運営される施設の行事にはなじまない。と言うより、これは明らかに反文化活動ではないのか」

ついでにもう一つ。数年前、「日本人とユダヤ人」という本が復刊されました。今、手許にその本がありますが、その末尾に「本書には、今日の人権擁護の見地に照らして、不当・不適切と思われる表現がありますが、本書の性質や作品発表時の時代背景を鑑み一部を改めるにとどめました。」という釈明文が載っています。この類の釈明は、古い映画やテレビドラマを放映するときには必ずといってよいほど付きます。これはなぜか分かりますか。

(3)については、社会的貢献を認めること自体が評価です。国語辞典には、「評価」の意味の一つとして、「肯定的にその価値を高く認めること」が載っていますよ。それから、支援の具体的内容はコムズ（松山市男女共同参画推進センター）の運営などに関して、行政側が考えることです。大事なことは、主婦も支援するという姿勢です。

(4)については、まず「主夫」は言葉になっていません。「主夫」は「主婦」に対抗して作られた新語でしょうから、「家夫」あるいは「家政夫」を意味したいのでしょうか。しかし、「主夫」に対応するのは「主妻」ではありませんか。それはさて置き、少なくとも男は出産や授乳（ミルク供給ではない）はできません。そのうえ母親と違って子供に対して生理的愛情を持ちませんから

(父親の愛情は、これが自分の子供だと自らに思い込ませて始めて生まれるもので、それゆえに社会的なのだそうです)、育児には不向きだと思われまゝ。したがって「家夫」は現実的でなく、男も女も違いがないと安易に考えられる人たちが唱える空理空論の世界でしか存在しえない、というのが私の見解です。家夫は実際にいるかもしれませんが、世の中には酔狂な人たちがいますから、それはそれでよいでしょう。目くじらを立てるつもりはありませんが、幸せは長続きしないだろうと思います。このたびの請願と係わりがあるとは思えませんが、問われたので一応見解を述べておきます。特殊なことを持ち出して、論点をぼかしたり一般論を封じようとしてはいけません。

(5)についてですが、私はジェンダー学はジェンダーフリー学だと思っています。なぜなら、ジェンダーフリー的性向を持たない人は、ジェンダーという言葉は必要ないので遣わないだろうと思うからです。ジェンダー学を生き甲斐としている人たちの大半は、過去においてジェンダーフリーを唱えていたのではありませんか。今は政府が行政から「ジェンダーフリー」を追放したうえに、いわゆるバックラッシュが激しくなっていますから、形勢が悪いとみて「鎧の上に衣を被って」いるにすぎません。「能ある鷹は爪を隠す」という格言もありますが、彼らはそういう能力は長けています。

最近の大学ではカルトの勧誘が激しくなって、学生は乗らないように警告されているはずですが。勧誘者はにこやかな顔をして近づき、甘くてきれいで穏やかな言葉で話しかけます。それと同じだと私は思っています。「女性に様々な可能性を示す」とか、「これからの時代の新たな道德意識を形成する」などというのもその部類だと思いませんか。私に言わせれば、今までせつせと道德を破壊してきた人たちがよくも抜け抜けと言えるものだ、です。「女性への様々な可能性の提示」と「主婦の軽蔑」とは、私の頭の中では結びつきます。“新道德研”というカルトに御用心！受験生の娘を持つある母親が、大学入学後に女

性学を勉強させられるのを心配していました。

一口に家庭といっても、それぞれの家庭の実情は様々で、その実情に合わせて様々な生活の流儀があります。つまり、市井人にとっては様々な生き方などというのは当たり前の話で、ことさらにジェンダー学者のご高説を拝聴する必要など感じないでしょう。第一、ほとんどの人が「ジェンダー」という言葉を知らないか、理解していないので、「ジェンダーって何?」、「難しそうですね」、「学者って世間知らずだね」の程度で終わりでしょう。だからといって、それが道德の廃れる原因とは思えません。善良な市井人を騙してはいけません。

ジェンダー学では「多様な」という言葉がしばしば用いられるようですが、私はこの言葉を「模範や典型がない」または「規範に縛られない」と理解します。「多様な価値観」を前提とすると、すべての価値が相対化されてしまいますが、それは「価値は存在しない」と言うに等しいと私は考えます。上の段落で市井人の生活は多様だと書きましたが、だからといってそこに望ましい家庭像が存在しないわけではないと思います。つまり、それは「多様な価値観」を前提としているのではなく、社会に共有されている価値観に基づいて多様な努力をしているのです。ジェンダー学の「多様な生き方」の具体的例についても私は思い当たることがありますが、ここでは述べません。

道德は常識のうちで、常識は学問ではありません。ジェンダー学が本当に学問だというなら、目標に道德を掲げるのはおかしくありませんか。学問の自由がありますから、思想・主義としてのジェンダー学を研究したい人はすればよいでしょう。しかし、社会全体への推奨を要求するのは傲慢で身の程知らずというものです。今、ジェンダー学が男女共同参画の基礎学問であるかのように主張する人たちこそ一思想を国民に押し付けて、思想信条の自由を侵しているの

です。

平和学だとか女性学だとかジェンダー学だとかいう言葉を聞くようになって、私は学問って一体何だろうと考えるようになりました。学問を学問たらしめる条件とは何だろう。私は在職中、熱及び物質移動学を担当していましたが、それは果たして学問だったのだろうか。

パオロ・マッツァリーノ著「反社会学講座」という本を少し前に読みました。この本では、「社会学は非科学的な学問である」とか、「渡る世間は自立の鬼ばかり」とか、「用語の定義が曖昧で、根本的な疑問を無視しているので社会学者は哲学者に嫌われる」など次から次へと興味深いことが紹介されます。この本の精神に従えば、平和学やジェンダー学は「学問」というより「論」の程度だと私は思います。ですから、平和論やジェンダー論という呼び方ならさして抵抗はありません。しかし、「学」が「論」に格下げされたら、もはや推奨の対象にはなりませんね。なお、パオロ・マッツァリーノ氏は平成のイザヤ・ベンダサンと呼ばれているようです。

昨年12月、愛媛大学が男女共同参画とジェンダー学の推進を宣言しました。理系に女教員や女学生が少ないから拡充せよとか、女性の視点を取り入れて新しい「知」を生産せよなどと書いてあります。しかし、理系に女教員が少ないのは、ジェンダー的偏見によるのではなく、研究者数の実態を反映しているだけです。工学部内では、女学生は化学系で比較的多く、物理系は少ないのですが、どうやら、女学生は理系を敬遠し、特に物理と合い性が悪いようです。それから、理系の「知」は女性の視点によって更新できるような代物ではありません。男か女かは関係ないのです。なんと、理系の世界はそもそもジェンダーフリーなのです！愛媛大学は愚かな宣言をしたものです。

昨年、私たちは松山市男女共同参画推進条例を読み解きましたが（その文書は同封）、私たちは言葉の戦場にいるのだとつくづく思い知らされまし

た。“ジェンダーフリーの隠語”を見抜くことによって私たちの作業は可能になったのですが、そのときは、まるでジョージ・オーウェルの小説「1984年」の世界にいるのではないかと思うほどでした。インターネットにジョージ・オーウェル「1984年」に関するWikipediaの解説が載っていますが、その中のダブルスピーク（二重語法）と呼ばれる語法の説明を次に抜粋します。

「矛盾した二つのことを同時に言い表す表現。「戦争は平和」・「真理省」のように、例えば自由や平和を表す表の意味を持つ単語で暴力的な裏の内容を表し、さらにそれを使う者が表の意味を信じて自己洗脳してしまうような語法。他者とのコミュニケーションをとることを装いながら、実際にはまったくコミュニケーションをとることを目的としない言葉」

松山市男女共同参画推進条例の前文の冒頭に、「すべての人が性別にかかわらず個人として尊重され、自らの意思によりその個性と能力を十分に発揮することのできる社会の実現は、私たちの願いである」という文章があります。あなた方はどのように解釈しますか。

最後に、私からさらに質問します。

- ・人は平等だと思いますか
- ・幸せのために完全な男女間平等が必要だと思いますか
- ・自由と平等は両立すると思いますか
- ・ジェンダー学の主論点は男女間の平等・不平等だと思いますが、平等・不平等の一般論としてそれだけで足りると思いますか。

草々

会員エッセイ 専業主婦万歳！





去年の秋から、今年の春まで放映された、NHKの朝のドラマ「ちりとてちん」は高い視聴率を取り、毎朝、見る人を楽しませてくれた。このドラマの中で、私が一番心に残っているシーンは、最終週の主人公が、最後の高座をつとめあげた後、何故やめるのかと問い詰める母に対して、昔、自分が言ったことを謝るシーンだ。

主人公は、高校を卒業し、自分の未来を考え悩んだ末、自分を変えようと大阪へ出る決心をする。そして、反対する母に向かって「お母ちゃんのようになりたくないからだ」と言い放って家を出て行ってしまふ。

主人公の母親は専業主婦である。化粧気もなく、いつもエプロン姿で、家事に明け暮れている。そんな母親の姿を見て、自分はああいう風になりたくない。もっと輝く主役で居たいと思うのだ。

確かに、専業主婦は輝く存在ではない。自分の居場所は台所だ。盆も正月も土日祝祭日もなく毎日、朝から晩まで、家事に明け暮れる。たまにはちょっとお洒落をして、ウィンドウショッピングをしてみたいと思う時もある。また、全ての家事を放り出して、一日中寝て居たいと思う時もある。しかし、結局、家族が美味しいと言って食べてくれることが嬉しくて、今日も台所に立つのだ。

若い女の子から見たら、夢も希望もない女の姿だと映るかもしれない。現に、女子高校生に専業主婦についてアンケートをしたら、自分は仕事と家事を両立したい、専業主婦にはなりたくないという答えが多かったらしい。

私の娘は今年大学生になり、親元を離れて一人暮らしを始めた。生まれてから、今まで、母親はいつも家に居て、学校から帰ったら、掃除も洗濯もきちんと出来ていて、食事の用意も整っているのが当たり前だったはずだ。今、親元を離れ、

大学に通いながら、自炊生活をしてみて、初めて、母親がしてきてくれたことが、いかに有難いことか気付いたようだ。母の日に「お母さん、今まで有難う」と携帯メールが届いた。

夫や娘が仕事を終え、また学校の勉強を終えて家に帰って来た時、家の中に明かりがともり、温かな夕餉の支度が出来ていることに、ほっとして、「ああ～やっぱり家は良いなあ・・・」と思ってくれることが、私の喜びだった。だから、外出していても、皆が帰宅するまでには、家に戻り、部屋を明るくして帰りを待った。そんなのはあなたの自己満足に過ぎないと言われるかもしれないが、私は、これこそが専業主婦の生きがいであり幸せだと思っている。

私が感動したドラマ「ちりとてちん」の最終週で、主人公は母にこう言った。

「お母ちゃんにひどいことを言ってしまっでごめん。お母ちゃんは、つまらないと思っていた。でも、お母ちゃんは、脇役で、主役を照らしてくれる太陽だった。私はお母ちゃんのようにになりたい。」と。

私はこの主人公の言葉を聞いた時、涙が止まらなかった。家の中ばかりに居て、人のことばかり心配して、人のことで泣いたり笑ったりしている母親の存在感が、如何に大きいものであるかということ、やっと主人公が気付いてくれたことが、本当に嬉しかった。

これは専業主婦であったからこそ出来たことだ。結婚し、子供を産み、家事と育児に専念しながら、家を守り、夫の親の介護までするということは、並大抵のことではない。そして、それは決して、お金がほしいからすることでも、人から評価されるものでもない。しかし、私は、専業主婦である自分を可哀想だとも、辛いものだとも思ったことはない。外に出てお金を儲けてくることはないが、毎日、台所に立ちながら、専業主婦で良かったと思っている。

数年前に「くたばれ専業主婦」という本が出て一時注目されたが、そのような本を書く人は、専業主婦になりたくてもなれな

かった人に違いない。私はこれからも家族のために元気で明るいおばさんで居たい。



### ■□□事務局からのお知らせ■□□

■松山市の坂の上の雲まちづくりに多大な貢献をされた石浜典夫（ただお）氏が先月亡くなられました。石浜氏がめざす会にご入会のおりに下さったお手紙を紹介させていただき、ご冥福をお祈り申し上げます。「小生も兼ねてより、性の差別と区別を混同したジェンダーフリー（日本だけの和製英語）の偏狭な思想に対し、大きな懸念を持っていました。「差別と区別の違いをはっきり認識しないと日本は駄目になる」とは、先年亡くなられた京都大学名誉教授・会田雄次先生が早くから戦後社会の歪みとして指摘されていましたが、ジェンダーフリーは全くその最たるものと言えます。日本の文化も道徳も破壊する亡国の思想といえるでしょう。幸い貴女がたのように、女性の立場から立ち上がって反対運動をされていることは、当地にとって心強い限りです。微力ながら、小生も諸手を挙げて賛同致すと共に、会員に参加させていただきます。」合掌



■『松山市議会を誹謗中傷した関西社会学会』を同封致します。このセッションのパネリストのひとり「姉が美人だったから対抗するには勉強で勝つしかな

かった。」と言い、質疑に立った女性は「妹が美人だったので勉強するしかなかった。」と同じことを言っていました。（おふたりとも十人並の美人でした。）

■会長の小笠原ミワ子が役員をしております「救う会愛媛」の大集会「拉致被害者を救出するぞ!」（7月6日 日曜日）のちらしを同封致しました。被害者全員の一刻も早い救出を願ってぜひご参加下さいませ。

■子供用の百科事典に「男の子の脳vs女の子の脳」というページがありました。「最初はみんな女脳。途中で男脳にヘンシーン！お母さんのおなかの中にいる赤ちゃんは、はじめはみんな女の子の体。男の子は、途中で体が変化して男の子の体になります。脳も、最初はみんな女性の脳ですが、途中で男性ホルモンの影響で男性の脳になるのです。」「できたおちんちん（精巣）から男性ホルモンが大量に出る。その影響で、脳も男性的に変化する。」脳が違うから、「男の子は車や電車が好きで遊び好きで、女の子はおしゃべりで人に興味があるのだ」というふうに早くから違いを理解しておくことはいいことですね。



■月2回「めざす会」学習会を開催しております。日時（原則は第1&3金曜日）や会場は随時お問い合わせ下さいませ。最近は学習テーマに若年層の性感染症を取り上げています。クラミジア、性器ヘルペス、尖圭コンジロームのような性病の罹患率は他の先進国の10倍と言われて久しいのです。性感染症が日本を滅ぼすと言っても過言ではない状況です。

■めざす会のホームページを開設致しました。「健全な男女共同参画社会をめざす会」で検索なさって下さい。

■会費が切れる会員の方には振替用紙と「入会のご案内・ご賛同者名簿」を同封しております。現在の会員数は665名。1000名をめざしております。この機会にご家族やご友人にもご入会いただけますようお願い致します。新しい方のお名前

は通信欄にお書き下さいませ。

## 健全な男女共同参画社会をめざす会

会長 小笠原ミワ子

〒790-0931松山市西石井1-3-30

電話090-3181-4004 FAX 089-964-3903

メール [t64r59@bma.biglobe.ne.jp](mailto:t64r59@bma.biglobe.ne.jp)